

---

# ハツコイ

心

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハツコイ

### 【Nコード】

N8489A

### 【作者名】

心

### 【あらすじ】

初投稿の短編「ハツカレ」「ハツカノ」のゆうとたくちゃんが、出会ってから恋人になるまでのお話。それぞれ存在さえ知らない所で、それぞれが別の人との恋愛に悩んでる所から書いてみました。連載は始めてで、ちょっと緊張してますが、頑張って書いて行きたいです！よろしくお願いします

## 夜祭（夕貴の夜）

「夕貴、今夜の夏祭り行こうよ！」

「えー、さなみとあたしと、二人で？」

「あのねあのね、お祭りのたこやきの屋台にね、あの雪斗くんが店番してんだって！」

咲波にその情報をもらって、わたしはすぐさまタンスから浴衣をいくつも引っ張り出した。

心臓がばくばく鳴った。

だって、夏休みにまで雪斗くんに会えるとは思わなかったから。

あ……。

はっとしてわたしは手を止めた。  
重く押し掛かるようなため息が出て、胸が痛くなった。

「……………」

咲波は、その情報どっから手に入れたんだろう…。

最近、嫌な事を考える。

考えれば考えるだけ、その予測は一つずつ確信に変わっていく気がして、

怖くて怖くて、戸惑う…。

でも、わたしは雪斗くんに会いたいよ。

だから行く。お祭りに。

「夕貴！わあ、浴衣めっちゃ可愛いじゃん！」

「本当？ありがとう…恥ずかしいな」

六時に神社の入り口で咲波と待ち合わせした。

咲波は浴衣は着てなかったけど、細身の長身には、どんな服も綺麗に着こなす力がある。短いスカートが似合う。顔も美人だし、綺麗な髪を結い上げていて、とても色っぽいと思った。

「ゆう、ちゃんとお腹空かせてきた？」

「なんで？」

「なんでって、だって、たこやきいっぱい食べなきゃじゃん！」

「あ……そ、そっか」

「ぼーっとしちゃって大丈夫？？」

咲波がくすくす笑ってわたしの頭を撫でた。胸がズクンって痛くなった。

咲波は、中1の頃からのわたしの友達。

この春から、一緒に皐月高校に通ってる。雪斗くんも一緒。中2でわたしが雪斗くんを好きになってから、

今までいっぱいいい協力してくれてて……。  
優しくて、大人で、わたしの大切な親友。

ねえ、咲波……わたしあんたに、無理させてるかな……。

「あ、あの屋台じゃない？」

「え？」

「あ、やっぱり！夕貴、ほんとに雪斗くんいるよ！！」

「え、何処どこ！？」

人ごみに目を凝らすと、わたしの目に、確かに映った。  
心臓がバキンと鳴った。

うわ…… 本当に、本当に雪斗くんだ……。

すぐどきどきして、思わず手に汗を握ってしまう。  
たまらない緊張感が全身に走る。

雪斗くんは、さわやかな笑顔で、元気にたこやきを売っていた。  
頭にタオルを巻いて、汗いっぱいかいて。

普段、学校では見られない姿に、わたしの興奮はもくもくと増すばかりだ。

「行こう、夕貴！」

「え……え、ええー」

咲波がわたしの手を引いて、ぐんぐんたこやきの屋台につれていく。  
ちょ…、ちょっと待って!!  
まだ心の準備が……

「ゆきちゃん!!」

……

わたしの胸は、またズクン…って痛んだ。

なに……今の

「よー、咲波と夕ちゃんじゃん!」

「ゆきちゃんがちゃんと働いてるか見に来たんだよ!」

「マジで?どう、サマになってるか?」

「うんうん、思ったよりマジメに働いてるじゃん!」

咲波はわたしの手を握ったまま…握ったまま、  
わたしの事なんて、忘れちゃってるみたい。

わたしはただ、雪斗ちゃんと咲波が楽しそうに話してる姿を、  
ひどく痛む胸と頭の中で、ただぼんやりと見ていた。  
見てるしかなかった。

……何これ、何コレ……。

逃げ出したいよ……こんなの、絶えられないよ。

咲波から、そつと手を抜いた。

咲波はそれでも気が付かない……。

わたしは涙で視界がぐらぐらして、唇が震えた。

ぐにゃぐにゃの視界に微かに映った、極めつけの映像……

雪斗くんが、咲波の耳に何か囁くように、そつと耳に、キスをしたこと……

咲波が振り返る寸前に、わたしはその場から離れた。いろんな気持ちでぐしゃぐしゃだった。

こんな痛いのが、初めて。

## 夜祭（拓哉の夜）

今日は夏祭りがあるそうだ。

でも、俺はあんまり行く気なんてない。

部屋でゴロゴロしていると、やっぱり鳴った…ケータイが。そしてやっぱり予想的中。

友達とゆーか、幼馴染の智輝からだった。

智輝と5時半に神社の入り口で待ち合わせた。

こうして毎年毎年、祭りに連れ出されるのは恒例だった。

神社の石段に座ってうちわをパタパタしていると、聞きなれた声が俺を呼んだ。

「拓哉ー！遅くなってごめんちゃー！」

見慣れた自転車で、人を避けながら智輝が迫ってくる。

……ん？

「あー…ああ、また余計なことを…」

智輝と一緒に視界に移ったものに、思わずテンションがガタ落ちした。



だから行きたくなかったんだよねあ……今年の祭。

智輝が俺の目の前に自転車を止めた。

「やあ、やあ、遅くなつてごめん！」

「ああ」

俺はぶっきら棒に答えた。

「こんばんわ、拓哉くん！」

「……………」

智輝の自転車の後ろから、浴衣を来た女の子が飛び降りた。

明るい茶髪を結い上げて、深い紺色の浴衣が、派手めな彼女の顔立ちに

とてもよく合っていると思う。

俺を見てやけににっこりしてる。

…分かりやす過ぎだったの。

「亜由古、智輝に誘われたんか？」

「うーん、まあそんなところ」

「へー……」

俺は思いつき智輝を睨んだけど、まんまと気付かないフリされた。

「行こうよ、わたし水あめ食べたい！」

「お、おい、引っ張んなよ」

亜由古が思いつき俺の腕をつかんで引っ張った。

ちらっと後ろを見ると、人ごみの中で、

ただ立ったまま、智輝が笑って俺たちを見てた。

ついてこない気だ……。

物凄く胸が痛くなった。

息を呑んだ。…だから、嫌だったんだ。

あんまり水あめを欲しがるから、

亜由子に一本買ってやった。

ひと気のない静かな石段に腰を下ろして、

二人で食べた。

亜由古とは、今年入学した風波高校で同じクラスになった。

入学当初から、顔立ちの明るさと、性格の活発さで男子から結構人気がある。

俺だって、可愛いと思った一人。

席が近くになった頃から仲良くなって、

いつの間にか、俺といつも一緒にいる智輝とも友達になったらしい。

智輝は何も言わないけど、俺はすぐに分かった。

智輝が亜由古に惚れた事。

……そして、智輝が俺に、その心を打ち明けない理由も、知ってる。

亜由子はきつと、俺の事が好きなんだって事。

智輝は俺が色々気が付いてること、きつと何にも知らない。  
でも、亜由古が俺を好きなことは多分知ってる。  
今日のことだって含めて、

アイツは俺と亜由古をやたらくっつけようとするんだ。

「拓哉くん？」

「……ん？あ、わりい……」

「ぼーっとしてるけど、大丈夫？？」

亜由古がくすくす笑った。

「……………」

「え……………な、…なに？」

亜由子が俺の顔を、いきなり真剣をして顔で覗き込んできた。

「……………」

あんまりじつと見てくるから、  
照れるやら、気まずいやら、変な空気が流れる。

「あゆ、なんだよ」

「……………」

次の瞬間、

亜由古の顔が迫ってきて、俺は目を見開いた。

「亜由古！」

亜由古の肩をつかんで叫ぶと、はつとした様に俺を見てきた。

「たく、どうして…？」

「な、何が？」

「……………ううん、なんでもない」

あゆはそう言って、顔を伏せた。

キスされんのかと思った。

まだ心臓がばくばくしてる。

あの瞬間、よぎったのは智輝の姿だった。

「……………」

ため息しか出ない。

友達に遠慮してんなんで、ほんとダセーな…。

「なあ、あゆ、智輝探しに行こーぜ」

「……………そうだね」

俺たちはまた、屋台の並ぶ人の波の中に戻った。

本当は気付いてる。

俺の煮え切らない態度が、智輝と亜由子を苦しめてる事。

付き合えないなら、振ってやればいいのに。

それも出来ないのは、やっぱり俺も、亜由古が好きだからかもしれない。

智輝の顔が、見れなくなるのが、怖いのかも知れない……。

## 出会い

どれくらい歩いただろう…。

いつの間にか、さつき咲波と待ち合わせをした、  
神社の入り口付近まで戻ってきた。

……さつきから、巾着の中でケータイが震えっぱなし。  
咲波が心配してかけてくれてるのが分かる。

でも、ごめんね。

今はどうしても出られないよ……。

さつきの光景を、  
思い出すと涙が溢れる。

怖いぐらいに目からぼろぼろ大粒が溢れて、  
頬を伝い、顎に溜まって、

自分の足に、雫がパタパタと落ちては弾けてく。

苦しくて、苦しくて、どうしたら良いのか……。

トントン……。

わたしは驚いて振り向いた。

誰かに後ろから肩をたたかれた。

だ、だれ…

全然知らない男の子が目の前に立っていた。

男の子はイキナリはつとした顔して、  
今度はたじろぎ始めた。

「あつ！いい、いきなりごめん！！」

「?????」

「あの、な、泣いてたから…」

「……?」

「すつごい泣いてるから、……」

「……………」

「だ、大丈夫？なんかあったん？って、俺なんかキモいよね、ごめんね！」

で、でも別にナンパとかじゃないんだよ？あ、あの…」

わたしはぐらぐら揺れだした視界の中で、  
必死で首を振った。

何、この人……。

そう思った途端、目がすつごい熱くなって、

驚いて止まっただけの涙が、一気にあふれ出てきた。

わたしたちは屋台の列から外れた、  
少し静かな場所でベンチを見つけて座った。

先に口を開いたのは、彼の方。

「少しは落ち着けた？」

「……………うん」

「ごめんね、俺がビックリさせちゃったから」

「…ち、違うよ！」

わたしの反応に少し驚いて、

男の子はくすつと笑って見せた。

「良かった。話せそうだね」

「うん、もう大丈夫…ありがとう」

なんか、本当に少し落ち着いた気がする。

不思議。

第一印象は、チャラチャラした

お調子者タイプなのかなって思ったけど…

見た目もなんか派手だし…。

金色っぽい茶髪に、肩耳だけでピアスが3つも。

でも、男の子の癖にまつ毛が長くて綺麗。

見た目こんな人なのに、

今は、ビックリするほど落ち着いた空気を持ってる。



「 ゆうき ” っていうの？名前」

相手の声にはっとした。…ぼーっとしてみたい。

「 う、うん。……何で名前？？」

「 巾着に刺繍が入ってる」

あ、そっか…驚いた。

「 俺は智輝ってゆーんだ。近所に住む高校1年生！」

「 えっ、おんなじ！わたしも近所に住む高校1年生！」

「 マジで？」

二人して笑った。

それからわたしは、

泣いている理由を智輝くんにした。

ともくんは、ただ黙ってわたしの話を聞いてくれた。

咲波は中学で一番初めに出来た  
大事な友達だとゆう事。

中二で雪斗くんを好きになった事。

咲波の気持ちに気が付き始めた…

中三の夏…。

優しく変わらない咲波の態度に、  
わたしも気付かないフリをしてきた事…。

雪斗くんの気持ちに気が付き始めた…

高校入学目前。

そして今日。

わたしは、咲波をずっと苦しめてきた事を  
目の当たりにした。

咲波だけじゃない。

雪斗くんの事も、わたしはきつと苦しめてる。

それが、自分の失恋よりも、耐えられないって事……。

「そっか……」

ともくんはそれだけ言って、  
しばらく黙った。

少しして、ゆっくり口を開いて、話始めた。

「俺もね、大事な幼馴染を困らせてるんだよね……」  
「幼馴染？」

智輝くんは黙って頷いた。

「そいつと俺、同じ高校なんだけどさ。  
高校入って、アイツのクラスにめっちゃ可愛い子がいたんよ」

「うん」

「それで、アイツ繋がりで俺もまんまと仲良くなれたワケ」  
「うん」

「男子に凄い人気あるんだよ。性格明るし、顔は可愛いし、スタイルも良い！」

「……はいはい」

「だからさ、……好きにだけはなりたくなかったんだよね……」

「……………」

「でもな、止められなかったんだ、気持ちか！」

「ともくんはケラケラって笑って見せた。」

その笑顔に、思わず胸がちくんてした。

「……あの子が泣いてるところを見ちゃったんだよ。」

「たまたま見つけちゃって……ほっとけなくて。」

「彼女も出来たこともないくせにさ、”俺が守らなきゃ”とか思っちゃって」

「うん……………」

「……その時、そばに寄り添ったとき、……好きだと思った」  
「……………」

わたしが頷いた時、ともくんは両手で顔を覆った。

それからゆっくり、重い口を開いた。

「その泣いてる理由が……アイツの事だった……」

「アイツ？」

「……………俺の大事な幼馴染」

「……………え……」

「好きだと気付いた瞬間に、彼女が見ている相手が俺じゃない事を」

知った。

……それから俺は、あの子と幼馴染を、意図的にくっつけようとはっきりしてる。

毎日、毎日……そればかり。

今日だって、アイツを呼び出して、あの子を連れてきて。

二人で祭りに行かせた。アイツの迷惑がつてる顔も気が付かないフリして……」

「……………」

お互い、押し黙ったまま、何も言えなかった。

やらなきゃならない事がある事、……知ってる。  
二人とも、ここで座ってるだけじゃいけないって事。

座ってるだけじゃ……

「あ……拓哉！」

……たくや？

わたしは顔を上げてともくんを見た。

ともくんは遠いところを見ていた。  
その視線を追って、わたしも目を向けた。

一人の、背の高い男の子が、こっちに向かって歩いてくる。  
”たくや”と呼ばれた男の子は、まっすぐ、このベンチを目指して  
進んでくる。

何故か。

わたしはその様子を、  
まるでスローモーションでも見てるかの様に感じて、  
ただただ、ぼんやりと眺めてた。

「とも！！てめー、どんだけ探させれば気が済むと思ってんだよ！  
！」

とっても大きな声。

そう叫びながらたくやって人は、  
さっさとわたし達の目の前までやってきた。

かと思うといきなり、ともくんの頭を一発バシン、と叩いた。  
「いつてー！！！」

「お前、ケータイなんで繋がんねーんだよ！」

「え、ケータイ？？…あ、今日持って来るの忘れたっばい！」

「おいおいおいおい……」

「ち、違う！！これはマジ！本当に素で忘れたー！！」

「……おいおい……ま、いいけどさあ……ん？」

……あ……。

最後の言葉と一緒に、男の子の視線がわたしに向いた。  
呆然と二人のやりとりを見てたわたしと、いきなり目が合ってしまった。

「……………」  
「……………」

その人を見たとき。

わたしはその”瞳”に驚いた。

凄く綺麗で。凄く優しい。

深くてまだらな茶髪はさらさらしてて、  
肩耳にだけピアスが開いてる。

よく日焼けした肌が男の子らしいと思った。  
第一印象…。

「あ、夕貴ちゃん。コイツが俺の幼馴染の拓哉だよ」  
「へ……………。…っ!？」

「それで拓哉、この子は迷える子羊の夕貴ちゃん！」

ともくんはめっちゃ笑顔で、とっても明るく、わたし達を紹介した。

でも。待って。

え…………この人が…………あの…………。

「迷える子羊ってなんだよ」

拓哉くんが突然、カラカラと笑った。  
あ……笑うと可愛いんだ。

「……拓哉。あ、亜由古は？」

ともくんがいきなり真剣な声で  
言うから、ちよつとびっくりした。

……亜由古？……あ、もしかして…。

「お前が全然見つからなくて、疲れて向こうで休んで待ってるよ。  
浴衣なんだから、歩き回ったら大変だろーが」

「あ……。でも、探さなくて良かったのに……」  
ともくんがそう言った時、

拓哉くんがパチン、って彼にでこピンをした。

「馬鹿。俺たちは三人で祭りに来たんだろ？」

「……………まあ……」

「亜由古に悪いと思ったら、罰としてお前迎えに行って来い！  
俺は疲れたからここで座って待ってる！さあ行け！！」

「で……でも……」

「亜由古は可愛いから、モタモタしてると変なナンパに……」  
拓哉くんがここまで言った時には、  
ともくんはもう走り出していた。

「まったく……」

そう言つて、拓哉くんがわたしの隣に腰をおろした。  
わたしは、人ごみの中に消えていく  
ともくんの後ろ姿を見てた。

亜由古ちゃんの事が、本当に大切なんだなつて思った。

「さて」

気が付くと、拓哉くんがわたしを見てた。  
優しい笑顔。  
心臓が、パキン…と鳴つた。

「……………??？」

「行こうか」

「？」

「さあ、立って立って！」

促されて、わたしは慌てて腰を上げた。

「……………なに？」

「俺と一緒に祭り回ろう。チョコバナナぐらいなら、買ってあげられるよ」

そう言つて、またくしゃつて笑う。

「お、お祭りつて…だつて……」

拓哉くんはケータイの電源を切つた。  
それをポケットに戻すと、  
まっすぐにわたしを見る。



そしたら……ほら、また笑う……。

「これで邪魔も入らない。 行こう」

拓哉くんに手首を掴まれて、  
わたし達はまた人の海の中に飛び込む。

熱くて、明るくて、優しい。  
光と音と、賑わいの中に……。

ねえ。

この時は気が付かなかったんだよ。

わたしの手を引く大きな手。  
しっかりした腕。肩。背中。

わたしをどんな気持ちにさせてたか、  
まるで知らんぷりの笑顔。

悔しいぐらいの憎らしさが、  
わたしの裂かれた心を暖かく埋めたこと。

オワツタ夜に、ハジマリがやって来たこと……。

## ちょこバナナ

拓哉くんがわたしの手を離してくれたのは、  
本当にチョコバナナの屋台の前だった。

別に、食べたいって言ってないのにな。

「どれがいい？」

拓哉くんがにこにこして問う。

わたしは答えなかった。

…いや、答えられない、のが正しいかも。  
だって、ワケ分からなくて。

相当困惑してる。

でも…

奢ってくれるならもらっておこうと思う。

「じゃあ、ピンクのチョコのやつ……」

「おっちゃん！ピンクのと、普通のちようだい！」

拓哉くんとおじさんのやりとりを

ぼんやり見てるしかなかった。

さっきまで掴まれてた手首が熱い…。

何となく手首をさすりながら、深いため息をした。

「2本で240円ね。ルーレット2回まわしてくれ」  
威勢の良いおじさんの声。

チョコバナナが並んでる台の横に、  
しょぼい機械が置いてある。

ボタンを押して、止まった所がアタリなら、  
表示されてる数をくれるらしい。

「あー、俺ハズレた！夕貴ちゃんは？一回押しな」  
「あ、うん……」

拓哉くんに言われて、何となくボタンを押した。

「おお、お嬢ちゃんアタリだよ！」  
「ええ！」

「夕貴！すごいじゃん！2本も！」

”夕貴” だって……。

わたしは、両手に一本ずつチョコバナナを持って、  
両手に一本ずつチョコバナナを持った、拓哉くんの後ろを歩いた。

なんでこんな事してんだろ、わたしは。

巾着の中は、今も引つ切り無しに震えてる。

親友からの連絡はまるで無視して、  
知り合ったばかりの男の子に、チョコバナナなんて買ってもらって。

わたしだけじゃないよ。

拓哉くんはもつと謎。

智輝くんと亜由古ちゃんは、きつと今頃心配してる。

戻ってきたら拓哉くんはいなくて、

一応、わたしもいなくて…。

おまけに、

拓哉くんはケータイの電源まで切って。

何なの。

何なんだろう、ほんとに。

だんだん不信感が積もってきた。

よく考えれば、いや、よく考えなくても。

わたしはこの人の事何も知らないじゃん。

「ね、あの金魚すくいの前の花壇座る？」

拓哉くんが、くるって振り向いて、

無邪気に聞いてきた。

…まだ何も答えてないのに。

もう座ってる。

仕方なく、わたしも隣に座って

バナナをかじった。

なんだかさつきから流されっぱなし。  
でも。

流されても全然嫌な気がしないのが、不思議。

「ごめんね」

わたしは拓哉くんを見た。

「ごめん、なんか巻き込んだじゃって」

「……………」

彼は顔を伏せた。

あんなに笑った顔が暖かい人が、  
今は息を呑むほど、寂しい顔をしている。

「智輝から、色々聞いたろ？」

「……………」

「……………」

「……………」

嘘をついても仕方がないことは分かっている。

だからこそ、答えが見つからない。

「うん」て言えば良いのか。

「ううん」て言えば良いのか。

ピンクのチョコバナナの最後の一口を飲み込んで、  
わたしは拓哉くんを見た。

目の前の屋台にゆらゆらと泳ぐ、

小さな金魚たちを見つめていた。

「ねえ… どうして、ちゃんと待っててあげないの？」

二人とも、今頃きつと心配してるよ？」

わたしが問うと、彼はちよつとだけ驚いた顔をした。きつと、わたしがずつと黙ってたからだろう…。

「良かった… 怒って話してくれないかと思った」  
わたしは首を振った。

二本目のチヨコバナナをかじって、  
拓哉くんが話す。

「俺はお邪魔虫だからな。俺は居なくなつた方がいい」  
「どうして？」

「俺がいたら、智輝は俺と亜由古をくつつける事しか考えない。」

亜由古は亜由古で、俺がいたら俺しか見ない」

「… 拓哉くん、亜由古ちゃんの気持ちに……」

「うん、気付いてるよ」

さらつと答えた。

そうなんだ…。

「… さつき、キスされるかと思つたし」

わたしの胸が、大きくどくん、と鳴つた。  
思わず胸に手を置いた。

まるで動揺してるみたい。

なに、今の……。

「… 拓哉くんは、どう思ってるの？」

「なにが？」

「亜由古ちゃんの事」

「……うーん……………」

拓哉くんはそのまま黙ってしまった。

わたしは、まずいことでも聞いてしまったのだろうか…。

「……俺にもさ、分かんないんだよね」

「分からない？」

「うん…正直、どうなのか自分でも分からなくて」

「……………」

「俺がいつまでもこんな事言ってるから、

二人が苦しんでんの、分かってんのかな……………」

拓哉くんは辛そうな顔をした。

なんだろう。

拓哉くんがこんな顔すると、わたしはとても心が苦しい。

彼の痛みが伝わってくるような感じ…。

さっき、智輝くんと話してたのとはまた、違う感じ。

わたしに何か出来ないのかな。

でも、よく知りもしないわたしが

首を突っ込むなんて、

図々しいと思われるよね…。

でも…

「拓哉くん」

「ん？」

「あ……………」



やっぱり言おうか悩んだ。  
どうしよう…  
でも。

伝えたいと思う。

「と、智輝くんは、拓哉くん…幸せになってもらいたいんだよ。  
きつと、ただそれだけだよ。」

だからね…気持ちには、正直になっていいと思う…よ」

「……………」

「智輝くんは、拓哉くんと、亜由古ちゃんと、みんなが幸せになれ  
ばいいって

思ってた…自分を犠牲にしてるから…だから…だから、  
せめて拓哉くんだけは、気持ちを正直にしてもいいかなって……」

「……………」

「ごめん！わたし、関係ないのに…」

「うつん」

拓哉くんは微笑んでいた。

胸が熱くなった。

拓哉くんのあの顔一つで、

「ありがとう」って、

言われてるのが分かったから。  
言葉にしなくても伝わる笑顔。

この人にはその力がある。

「俺は、亜由古が好きなのかも知れない」

「……うん」

「でもきつと、智輝に遠慮してる…正直になる事は…アイツを裏切る気がして……」

「違うよ」

わたしはチョコバナナの棒を強く握った。

「自分の気持ちに正直になる事は、大切な友達を裏切る事じゃないよ。」

素直になったって、智輝くんは拓哉くんを、悪く思ったりは…絶対にしないから」

しばらく沈黙が続いたけど、

拓哉くんは、噛み締めたように答えた。

「……うん、そうだな」

拓哉くんが力強く頷いたのを見て、  
わたしの何かが固まった。

わたしは、この言葉を、

伝えなくちゃならない人が居る事。

気付けた。

わたしだって同じ。

智輝くんと同じだよ。

咲波を悪く思ったりしない。むしろ、

ずっと傷つけてきたことを、謝りたいよ。

今なら出来る気がするの。

となりに、笑っていてくれる人がいるから。

「拓哉くん」

「ん？」

「あのね、わたしもこれから、正直になる」

「？」

「見てて……頑張れる気がするの」

彼が見ててくれる事が、

どうして自分の力になるのかは、分からない。

でも。

あなたがわたしに素直になってくれたみたいに、  
わたしもそんな自分でありたいと思った。

それだけで理由なんて、十分だよね。

## 失恋

わたしは巾着の紐を解いて、  
ケータイを取り出した。

咲波からの着信と、……雪斗くんからの着信。  
凄手数。

二人の名前を見て、思わず息が止まる。

不安がってる咲波の横には、

きっと今も、雪斗くんが付き添ってる……。

ううん。

振り切るように頭を振った。

考えても仕方が無いから。

震える指で、ボタンを押した。

泣くかも知れない。

うまく話せないかも知れない。

辛くて、痛いかも知れない。

でも。

となりには、拓哉くんがいるから、出来る気がする。

この気持ちを信じたい。

番号を発信した。

耳にそつと当てると、呼び出しの音が聞こえる。

心臓が物凄い音を立てる。

息が上がる。

まだかかってもないのに、

すでに苦しくて苦しくて、

思わず今にも、逃げ出してしまいたくなる。

出ないで、なんて、願ってしまう……。

「…も、もしもし……ゆうき？」

「さ、さなみ……」

声が震えた。

まずい、涙が溢れそう。

泣いたら駄目。

今泣いたら、咲波が余計に不安になる。

でも……やばい。

声が震える……。

涙をこらえる為に、無性に身体が強張る。

無意識のうちにわたしは、

棒が折れてしまうんじゃないかってぐらい、

チヨコバナナの棒を強く強く握りしめていたらしい。

それに気が付いた拓哉くんが、

わたしから、そっとそれを取った。

そして、

今度は空いたその手を、

まるでわたしを励ますように、

ゆっくりと、握ってくれた。

あつたかい……

大きくて、骨ばったしっかりした手。

その手は本当に、本当に

暖かくて、力強くて、

わたしの息が、自然と整っていくのを感じる。  
今なら、落ち着いて話せる気がする。

不思議…。

「咲波、今ひとり…？」

「……………」

「もう、いいんだよ。噓つくの、やめよう」

「夕貴……ごめんね……」

咲波は電話の向こうで泣いている。

その声が苦しかった。

涙を流す彼女は、一体どれだけ苦しかった事だろう。

「ごめんね、さな」

「……どうして夕貴が謝るの？悪いのはわたしだよ」

「違うよ。さなは悪くないよ」

「だって……わたしは……」

「ずるいのは、わたしだから。」

本当はさなの気持ち分かって……

ずっとずっと苦しめてて、ごめんね……」

自然と、頬を涙が伝う。

「ゆづき……本当に、本当にごめんね……」

「いいの……もういいんだよ」

「ごめんね……わたし、ちゃんと…全部話すから…」

わたしはその言葉に、  
目を閉じた。

雪斗くんの事、ほんとに好きだった。

雪斗くんは本当に素敵で、  
わたしにたくさん、教えてくれたの。

ときどきする気持ち。

きゅんってする想い。

あったかくなる心。

胸がいつぱいになる気持ち。

きつい胸の痛み。

苦しい日々。

寂しい気持ち。

ハラハラさせられたり、

そわそわさせられたり。

嬉しかったり、励ましてくれたり…。

苦しくて、痛くて、切なくて、もどかしかったけれど……

どんな時も、幸せだったの。

初めて人を想った。

全部。初めて味わった気持ちだった。

ほんとはね、知りたいよ。

咲波の事、雪斗くんの事。

わたしは弱いし、決して良い子ではない。  
人間だから、

嫉妬だって、憎しみだって、妬みだって、  
たくさん持つているよ。

問い詰めてやりたい。

追い詰めてしまいたい。

洗いざらい聞いて、

とことん謝ってもらいたい。

でも。

そんなの意味無いんだよ。

誰も幸せになれない。

ただ、こうゆう結果だっただけ。

わたしの好きだった人が選んだのが、

たまたまわたしの大切な親友だっただけ…。

もうそれで、いいんだよね。

わたしの手から伝わってくる優しい温度が、  
わたしの心にそう問いかけてくれている。

そんな気がする…。

「咲波……もう、いいよ」

「……………え？」

「もうね、雪斗くんの事…わたしは聞かなくても  
大丈夫だよ」



「……夕貴？……駄目だよ。」

とてもじゃないけど、そんな訳にはいかないよ。

わたし、ほんとに最低な事してるのに」

「ううん。だって、わたしは咲波がそれ以上泣くの……耐えらんないよ。」

それに、せっかく好きな人と両思いなんだよ？普通は幸せであるべきでしょ？」

「夕貴……」

「だからもう、泣き止んで。ね？」

わたしなら大丈夫。ほんとに平気だよ。

……今も、一人じゃないから」

わたしはそつと拓哉くんを見た。

拓哉くんはただ黙って、

ゆらゆら泳ぐ金魚を見つめて、じっとしていた。

「一人じゃないって……夕貴、誰といるの？学校の人？」

「それは内緒」

「どうして？？気になるよ！」

「ひみつひみつ！今度絶対に話すからさ」

「えーっなに？凄い気になるじゃん」

「わたしの事はいいいから、咲波。」

今夜は雪斗くんと、お祭り楽しんで」

「夕貴……本当に……本当にごめんね」

「もう謝るのなしたよー。まったくもう。」

今度謝ったら、チョコバナナおごりね！」

咲波がくすくすと笑う声が聞こえた。

良かった。

咲波が笑ってくれると、わたしは安心する。

これで良かったんだよ。

わたしの気持ちは穏やかだし、  
咲波も雪斗くんも幸せなんだし。  
良かったんだよね！

「ありがとう、夕貴。わたし約束するよ」  
「なに？」

「ゆきちゃんへのこの気持ちと、この関係を、絶対に無駄にはしないから」

「うん…わかった。その約束、覚えておくから…」。

さあ、これから頑張るんだよ！ハツカレと！」

「夕貴。本当に本当に……ありがとう」

電話を切った。

終わった。全部終わった。

お祭りでの一騒動も。

涙も。悩む心も。迷う心も。

痛くて、苦しい胸も。

着信の嵐も。

わたしの想いも…。

中二からの、想いも……。

わたしの恋は、終わってしまった……。

パタ……パタパタ……。

「あ、あれ……」

わたしの目から涙が流れていた。

あれ……なんで……。

悲しくも、辛くもないのに。

無意識に、ただあふれる。あふれた涙が、

次々とわたしの手をにぎる拓哉くんの手の中甲に落ちる。

「ご、ごめんね！やだな……なんでこんな泣いてんだろう」

焦って目を擦った。

だけど、その手を、拓哉くんが掴んで静止した。

「いいじゃん、泣けば」

わたしを見る彼の目は、驚くほど、真っ直ぐ……。

「俺はどこにも行かないさ。夕貴の気が済むまでここにいるよ。  
だから泣きなよ。……ずっと、好きだったんだろ？」

バタバタと落ちてく、涙の音を聞いた。

「……………う……ん……」

声は震えた。

視界はゆがみっぱなし。

「本気で想ってんなら、涙が流せない方が、よっぽど失礼なんだ」

もう我慢できなかった。

ずっと頑なに閉じていた何かが、

ゆっくり解けてしまつていくかんじ……

わたしは顔をゆがめて、

力いっぱい歯を喰いしばって、

それでもそれでももれる声を、

我慢することはもう出来なくて。

ぼろぼろと流れ出す涙を、全部受け入れた。

無駄にしないように、

必死で、色々な想いや気持ちを込めて泣いた。

一滴たりとも、無駄にはしない。

全部流れてしまつてほしい。

もう泣かないで済むように。

わたしが人を好きだった気持ちを、  
誇れるように。

次の恋が無事に受け入れられる様に、  
心に場所を空けてもらう為に。

暖かくて、大きな手が、

わたしには余計に切なくて、

いつの間にかわたしは、

ワンワン声を張り上げて泣いていた。

周りの人がジロジロと見た。

金魚屋のおじさんが迷惑そうに睨んだ。

それでも泣いた。

拓哉くんはそばにいてくれたから。

泣いているわたしを恥ずかしいとも、うるさいとも言わず、

ただずっと付き添ってくれる彼の大きさに、  
わたしは甘えずには居られなかった。

泣いてる胸の中は、  
いつの間にか

「ありがとう」で、  
いっぱいだったんだよ……。

## 祭りのあと

「家まで送るよ」

「うん……ありがとう」

拓哉くんは、わたしの手を引いて、  
ゆっくり歩く。

家の前まで着くと、その手をそつと離れた。  
少し汗ばんだ手に、生暖かな風が触れる。

「じゃあ、俺は行くから」

「うん……本当にありがとう……」

「……………」

「……………」

俯いたまま。

次の言葉も、

次の一歩も、出ないまま。

何かを期待してるから？

何か、ほんとは言いたい事があるから……？

それは、お互いに、きつと。

思い切って顔を上げた。

”このままじゃ嫌だ”って、  
何かが強く思ってる。

「　　っ、……………」

でも…。

もうそこには、誰も居なかった。  
誰もいない。  
彼は、消えてしまった…。

「また、会いたい　、」

はっと目が覚めて、一瞬きよろきよると  
辺りを見回す。

目に映るのは、いつもの天井と、四角い部屋。

深い深いため息と、重い脱力感。  
両手で思わず、顔を覆った。

もう何回目よ。

いい加減にして。こんな夢。

わたしの脳みそは、一体何を思っでこんなもの  
見せるのだろう…。

のっそり起き上がって、机の上の卓上カレンダーを見た。

お祭りからは、今日でもう、三週間もたった。

早いな…。

今日から新学期。

「おはよう！夕貴」

チャリで駅まで向かうと、咲波と雪斗くんが立っていた。  
二期からは、朝の登校に新入りが入った。

「おはよう。いやー、二人とも真っ黒ですな！」

「ゆう、それ二日前にも聞いたよ」

咲波がくすくす笑った。

「夕貴は焼けなさすぎじゃねーの？」

雪斗くんもはにかんだ。

「いいのー。わたしは美白美人になるの！」

わたしの言葉に、今度は二人して笑った。



咲波と雪斗くんは、一緒に海の家でバイトをしていた。  
雪斗くんの親戚がやっているお店らしい。

二日前、わたしも友達と一緒に食べに行ったのだ。

真っ黒に日焼けした二人はお似合いで、

そんな二人を見ているだけで、気持ちが暖かくなる。

まさか、こんな形で三人して歩く日が来るなんてね。

夏休み前には、本気で有り得ない事だった。

変なの。

そんな事考えると、頭を掠める。

今朝も見えた夢こと……。

学校に着いたけど、

わたしは始業式に出る気分には  
なれなかった。

屋上の日陰でぼーっとしていた。

空は真っ青な快晴で、

雲ひとつない。

目を閉じてても、開いていても、

眩しかった。

「夕貴ー？いる？」

声のする方に顔を向けると、  
入り口からそつと、咲波が覗いていた。

「さな！いるよ」

「あつ！こらー、サボったらいかんでしょ」

「人の事言える？」

”あはは”と笑って、咲波が入ってきた。  
わたしのとなりに、腰を下ろした。

「どうしたー？夕貴」

「なに？ いたたっ」

いきなり両頬をぎゅうつとつねられ、目を見開いた。

「！！！！？」

「何年友達やってると思ってんだ！トボけてもダメ！！」  
パツと開放された頬を、思わずさする。

「心配してくれたんだ、ありがと……」

咲波に話した。

お祭りの日のこと。

”拓哉くん”という、男の子の事。

……夢のこと。

「そつかあ…そんな事があったのか」

「うん………」

「ごめんね夕貴。もっと早く、気付いてあげれば良かったね」

「さなが謝らないで。別にあたしは平気だよ」

「嘘！平気なもんか、そんな顔して」

そつと頭を撫でてくれる咲波の手が、とても温かくて、ほっとする。

目が、じわあつと熱くなる……

ぽろつとこぼれた涙に、自分自身ではっとした。

「や、やだな…なにこれ」

「夕貴………」

「やだやだ、もうどうでもいいのに」

「夕貴」

「あの時、いつときの人だったの…だから…」

目を擦れば擦るだけ、  
どんどん溢れてくる。

わたし、こんなに思いつめていたの？

「夕貴、近所に住んでるんでしょ？また会えるよ。

諦めないで期待しよう、ね？」

「無謀だよ。近所なんて、あまりにも漠然としすぎてる」

「そっかなあ…地元の高校を風漬しに探せば、  
どっかでヒットするんじゃない??」

「ちょっと……それ、ストーカーだよ？」

こんな事ばかり言う咲波が傍にすることで、私は本当に救われるの……。

昼過ぎ。

駅で二人と別れて、わたしは自転車をこいだ。九月に入ったのに、暑さはほんとに容赦ない。あまりの暑さに、アイスが食べたくなった。近くのコンビニに寄った。

レジでお金を払ってる時、ふと思い出した。

このすぐ近くに、気持ちの良い木陰のある、素敵な公園がある事を。

「……………」

アイスと一緒に、サンドイッチとお茶も買って、コンビニを出た。

自転車はコンビニに置いたまま、公園まで歩く事にした。

木の葉二丁目公園。

その公園には、  
大きな木がたくさん立っていて、  
一番大きな木の下に、ぽつんと、  
一つだけ緑のベンチが置いてある。  
わたしはその場所が、子どもの頃から大好きだった。

少しだけ、今の憂鬱が晴れるかもしれない…。  
そう思うと、  
久々に行く公園に、ちよつとわくわくした。

公園までの一本道をぐんぐん進む。  
入り口が見えてくる。  
お腹も空いたし、暑いし、早く座りたいし。

公園に一步踏み込んだ時。

わたしは全身が、ガクン、と硬直した。  
持っていた袋を落とした。

「……………」

緑のベンチ……。

どうして…。

涙が頬を伝った。

紛れもなく。  
彼が、  
そこにいた。

## サイカイ

ぐらぐら揺れる視界に、確かに移る。

茶色い髪。

優しい目。

広い肩。

大きな手。

間違えない。

間違える分けない。

見間違えたりしない。

一夜だけの、たった一時のあの瞬間が、

わたしを毎夜悩ませるほど、

わたしには…

キラキラと焼きついてる。

そつとまぶたを閉じると、

あふれた涙が、ぱちん、とローファアを打った。

同時に。

彼がふと、私に向いた。

目が合った。

「……………」

「……………」

私の視界に映る彼の目は、  
みるみる内に見開く。

彼は突然、何かに弾かれる様に、ぱっと立ち上がった。  
立ち上がったその背の高い、細い身体。

絶対にそう。

そこにいるのは、紛れもなく、  
”拓哉くん”。

「ゆ、夕貴…ちゃん」

懐かしく通る声に、心が包まれる思いがした。  
あたたかい声。

両手で涙をぬぐって、頭をふった。  
何泣いてんだか、恥ずかしい…。

「覚えてるの？わたしの事」

「うん、もちろん。そっちは…」

「覚えてるよ。拓哉くんだよね」

「あはは…うん。覚えててくれたんだね…」



しばらく沈黙になる。  
だつて、何を話せば良いのかわかんないよ。  
久しぶりだけど、それだけだし。  
接点とか無いんだし…。

「……………」

「……ねえ」

「…え？」

「夕貴ちゃん、もしかやアイス買った??」

「???…うん、買ったけど…」

「袋からたれるその雫の量から見ても、完全に溶けてるよ」

「え?! あーっ!」

ぎよつとして、地面に落ちた袋を見ると、そこには見るも無残な光景があった。

コンクリートが水で色を変えていた。

慌てて袋を拾って、中を覗いて……心底愕然としてしまった。

……大ショック! 凄い楽しみにしてたのに…。

「夕貴ちゃんて案外抜けてんだなあ」

カラカラと笑う彼が、憎らしい。

誰のせいだよ、誰の!

「いいね、そうゆづの」

「何が?」

「この前は泣いてるところしか見れなかったから」

「……………」

何だか、一瞬どきつとした。

あの夜は、相当自分にとって、特別みたいだ……。

「おいでよ。一緒にコンビニ行こう」

「え…もついいよ。諦める」

「いいから、いいから。行こう」

そう言うのと、彼はてくてくと先を歩き出した。

どうしようか困って、慌てて自分もついていった。

5分後。

二人でコンビニの前で、アイスバーをかじっていた。  
買ってもらった。アイス。

また奢ってもらっちゃったよ…。

「ごちそうさま。ごめんね…なんか」

「んー。ごめんね、よりも、”ありがとう”のが嬉しいかなあ」

「あ、うん…。ありがと」

何も言わずに笑った彼の顔に、しばらく視線を取られる。

「夕貴ちゃんは、どうして公園に来たの？」

「あの公園ね、小さい頃から大好きなの。緑のベンチが特に」

「マジ？おんなじ!!」

「本当？」

「俺もあの場所好きなんだよね。なんか安らぐってゆーか…」

自分の気持ちを、軽くしてくれそうな気がすんだよ」

気持ち分かる…わたしも同じこと考えた。

だからあの公園に行ったから…。

「……拓哉くん、何か悩みでもあるの？」  
「ん？どうして？」

「あ、うつん。何でもない、ごめんね…」

アイスをかじった。

ふと見た彼の表情で、なんだか伝わってしまった気がした。  
何か、悩みを抱えてるんだってこと…。

「俺、そろそろ行かなくちゃ」

「え…」

「智輝んと此行かなくちゃなんねーんだ。覚えてる？智輝」

「うつん。幼馴染でしょ？あの金髪の…」

「そうそう！これからアイツん家にCD借りに行くんだ」

「そっか。あ、アイス本当にごちそうさま」

「うつん、いいよ」

拓哉くんは、最後の一口を口に入れて、  
棒を捨てた。

わたしはそれを見ていた。

…見ていた。

……見ているしかなくて、固まっていた。

神様。

これは……これはチャンスですか？

って、聞くまでも無いこと。  
何も言えないで終わるの？  
何も出来ないで終わるの？

今度こそもう、

二度と会えないかもしれないんだよ？

「それじゃあね」

「う、うん、……ば、ばいばい………」

彼は背を向けた。

「……………」

歩き出してしまった。

「……………」

どんどん、どんどん、  
離れていく。

行ってしまう。行ってしまう  
……！！

「あ、の、さ……！」

彼が、ずっと向こうで、立ち止まった。

まさか。

わたしの方に、戻ってくる…。

「あ、あのさ……」

「うん……」

やけに胸が高鳴る。

「あのさ……水族館、スキ？」

「水族館？」

「行かない？一緒に」

「……………」

わたしは首を縦に振っていた。

アドレスを、交換した。

木の葉二丁目公園、ありがとう…。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8489a/>

---

ハツコイ

2010年10月28日02時40分発行